

青年期の死に対する態度へのメディア作品視聴の教育的影響

著者	河村 壮一郎
雑誌名	鳥取短期大学研究紀要
号	54
ページ	1-7
発行年	2006-12-01
出版者	鳥取短期大学
ISSN	1346-3365
URL	http://doi.org/10.24793/00000171

青年期の死に対する態度へのメディア作品視聴の教育的影響

河 村 壮一郎

Soichiro KAWAMURA : The Effects of Educational Media on Adolescent Attitudes toward Death

青年期は死の概念が発達する段階であるが、現在の日本では態度形成に関わる直接的経験の機会が少ないと考えられる一方、マスメディア視聴からの影響が予想される。本研究では、専門学校生を対象にして生死の考え方に影響を与えたメディア作品について調査を実施した。その結果、最近視聴した作品からの前向きな影響が強く意識されているという傾向が認められた。ふだん生死を考える頻度には個人差が大きく、作品の視聴から影響が強い対象者は生死の意識頻度が高いという結果が得られた。

キーワード：死に対する態度の発達 メディア視聴の影響 青年期 死への準備教育

1. はじめに

個人がもっている死に関する概念や態度は様々な経験を重ねることで変化することがわかっている。死の概念は年齢とともに発達し、一般に成人期までに確立される¹⁾。青年期では死に対する態度が児童期から大きく発達することが示されている²⁾。この間に、死に対して肯定的なとらえ方をするようになり、生を全うしようとする意志が強くなる。また、死のもつ現実的な意味や死に伴う感情や具体的な死の原因について深く理解されることが期待される。青年期は死への態度を形成する重要な段階であるといえる。

しかし、このように死の概念や態度の発達が期待される青年期において、現代社会の特徴から死に関する経験をすることが乏しいことが指摘されている³⁾。現代の人々は死に関して直接的な経験することや死について身近な他者と会話することが少なくなっている⁴⁾。ネガティブな意味をもつ死を意識することが回避される傾向がある。死をタブー視す

るといった個人が積極的に死を遠ざけようとするだけでなく、社会環境も日常生活から死が遠ざかりやすい状況にある。例えば、自宅ではなく病院で死を迎える人が増加したことは、家族が死に至るまでの経過を知る機会を少なくしていると考えられる。このように個人や社会に死を回避しようとする傾向があるため、家庭教育や社会教育の中で青少年が死について知る機会が減少していると考えられる。

そこで、児童期や青年期に主に学校教育において死についての知識を伝え、その態度を育成する必要性が提唱されている。死への準備教育は欧米での導入がすすんでいる⁵⁾。20世紀以降死をタブー視する傾向があったドイツでは、1970年代から学校教育の中で死への準備教育が積極的にすすめられており、中学生や高校生を対象にして生と死についての教科書が作成されている。また、アメリカの授業では死への準備教育が系統的に実践されている⁶⁾。日本においても死への準備教育に関心が高まっているが、その実践を行っている教育機関は一部であり現在までに組織的な取り組みをするまでには至っていない

い。したがって、国内の青年は死に関する経験や教育の必要性が高いにもかかわらず、そうした機会が少ないまま、死への態度を形成している現状があると考えられる。

青年期にはマスメディアの視聴時間が比較的長いことが示されている⁷⁾。そこで、メディアから様々な情報を取得し、仮想体験をし、価値判断の基準をつくっている可能性が高い。死についてもメディア視聴時に日常生活にはない経験をしている可能性がある。したがって、青年期の死に対する態度が書籍、映画、テレビといったメディア視聴の影響を受けて発達していると予想される。

看護や医学の分野では死に関する教育は専門的になされることがあり、先駆的な試みがなされやすい。日本の看護教育でデスエデュケーションにビデオ教材を導入した事例が報告されている⁸⁾。教材には公共放送された番組の録画VTRが用いられ、その種類には科学番組やドキュメンタリー、ドラマが含まれていた。これらの番組視聴を通じて学生は死を自覚し、死と直面する人について理解を深めることができたことが報告されている。メディア視聴のみによって死に対する態度が意識化されたのである。この授業では教員から意図的にメディア視聴がはたらきかけられているが、そうした作品自体に死に関する意識を高めるといった効果があると推測することができる。視聴者は作品で描かれた世界や内容あるいは制作意図に自発的に関心を寄せると推察されるためである。そこで青年が生死について考えようとはあらかじめ意図したのではなく日常視聴した作品から、死への準備教育の役割が果たされている可能性がある。

従来の死への態度に関する発達的研究では、一般のメディア作品を視聴することの教育的役割について十分検討されていない。学校等での死への準備教育が主な研究対象であり、青少年の自律的発達という観点が欠けていたためと考えられる。そこで、本研究では青年期の生死に関連するメディア作品の視聴経験と影響についての意識、また生死に対する意

識の強さとこれらメディア作品の視聴経験との関連を調査する。青年期にそうした作品を視聴することによって、死への関心が強まったり、生死について考える頻度が高くなると予想される。

2. 方 法

- (1) 対象者 福祉系専門学校1, 2年生145名(男子63名, 女子81名, 無回答1名)であった。
- (2) 調査時期 2006年1月
- (3) 調査項目 質問内容は独自のもので、大きく3つの内容から構成されている。

項目1 生死についての自己の考え方に影響を与えた1作品について6つの質問からなっている。この項目の作品は最初に回答されるため、同様の内容である項目2で記述される作品よりも回答者への影響や印象が強いと考えられる。そのため、項目1ではより詳細な質問を設定し、以下の6つの下位項目を構成した。

①作品名 作品のタイトルや題目が自由記述された。回答されるメディアの種類として本、小説、ストーリー、コミック、映画、ビデオ、テレビ番組が明示された。

②作品の概略 3行程度のスペースに作品の概略が自由記述された。この項目は回答された作品が実際に視聴されているかどうかを確認するために利用された。

③視聴した時期(年齢) 作品を視聴した年齢が自由記述された。

④視聴のきっかけ 作品を視聴したきっかけが2行分の空欄に自由記述された。

⑤作品からの影響度 影響の強さについて「とても強い」、「やや強い」、「やや弱い」、「とても弱い」という4段階尺度が構成された。

⑥影響の内容 影響を受けた内容が3行程度の空欄に自由記述された。

項目2 項目1で回答した作品以外に生死に関する考え方に影響を与えた作品名のリストが記述され

た。回答される作品数には制約がない。

項目3 ふだん生死について考える頻度が4段階尺度「とても多い」,「やや多い」,「やや少ない」,「とても少ない」で回答された。

(4) 手続き 学年ごと集団で調査を実施した。質問用紙はB4, 1枚であり, 回答に要する時間は20分程度であった。

3. 結 果

最初に回答項目ごとに順番に結果を分析し, 次に項目間の関係などを検討する。

項目1①で作品名が確認された回答数は116であった。このうち, 項目1②で作品の概略を示さなかった回答者は19名いたが, 他の項目での回答内容を吟味した結果, 作品名を回答した人すべてが実際にその作品を視聴した経験があると判断した。したがって, 回答者の80%が生死の考えについて影響を受けた具体的作品があることになる。一方, 作品名を示さなかった20%の回答者はメディアからの影響を自覚していないと考えられる。

項目1③視聴時期への回答はすべて年齢に換算した。平均年齢は17.1歳で, 最頻度年齢は19歳であった。視聴年齢の分布がFig. 1に示されている。17歳以降に視聴した作品を回答した割合が多いことがわかる。

項目1④視聴のきっかけに対する回答数は108であった。この回答を類似している内容ごとに整理した結果, Fig. 2に示される回答割合が得られた。回

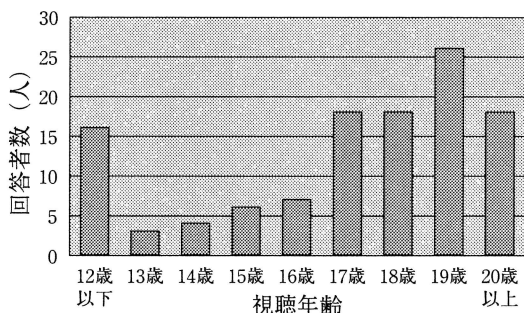


Fig. 1 作品視聴年齢ごとの回答者数

答率が高かった内容は「テレビ・CM」や「偶然」であり, その後「友人」,「学校, 授業」が続いた。

項目1⑤影響の強さに対する回答の割合がFig. 3に示されている。「とても強い」,「やや強い」を合わせると, 項目1①で作品名を記述した回答者の9割近くが強い影響を意識していることがわかる。

項目1⑥視聴の影響内容について101名からの回答があった。1人の回答者が複数の影響を記述した場合はそれぞれの内容を個別に抽出し, 延べ124件の内容が得られた。この回答から意味が共通している項目をまとめ, 集計した結果がTable. 1に示され

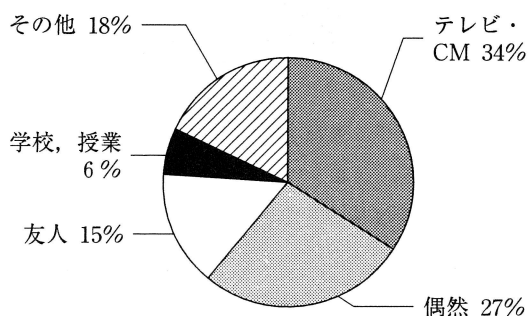


Fig. 2 視聴のきっかけ（割合）

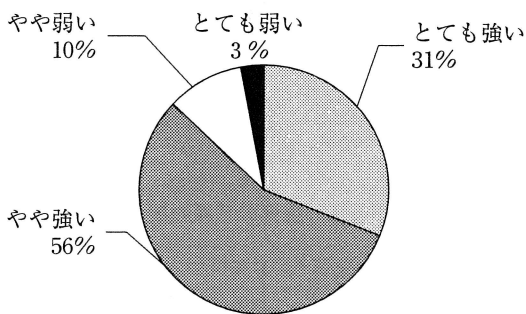


Fig. 3 影響の強さ（割合）

Table. 1 メディア視聴の影響内容

回 答 内 容	人 数
命の大切さ・感謝	25
前向きな生き方	20
死を考えるきっかけ	12
自分の生き方見直し	7
死の重大さ	6
戦 争	6
死への不安	5
きずなの重要性	5
生死を考えるきっかけ	5
命のはかなさ	5
病気の怖さ	5

ている。命の大切さを再確認したことや前向きに生きる姿勢を重要だと考えたとする回答数が多かった。死に直面して生の価値を再認識する影響が認められた。また、死を考えるきっかけとなったという影響も示された。さらに、死について不安や恐怖を感じたとの回答も見られた。

項目2で回答された延べ作品数は235であった。回答数の分布がFig. 4に示されている。無回答者の

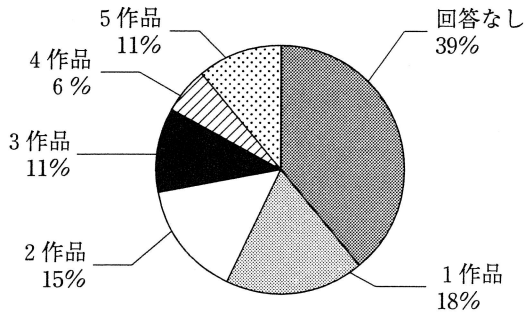


Fig. 4 項目2の回答数分布

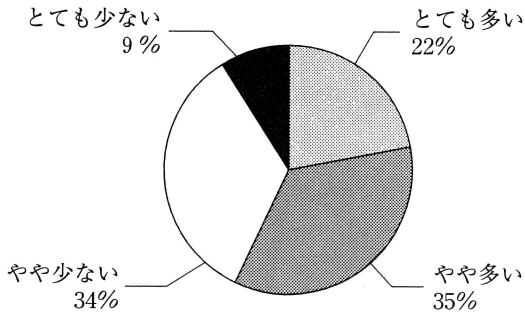


Fig. 5 生死の意識頻度

割合が比較的多く、回答数が多いほど該当する人数が少なくなっている。

項目3で回答された生死の意識頻度がFig. 5に示されている。回答には個人差が大きく、「とても多い」と「やや多い」を合わせると回答者の半数に達した一方、「少ない」との回答者も半数に近かった。

次に、回答者の所属が回答と関連しているかどうかを分析した。項目1⑤の尺度得点、項目2の回答数、項目3の尺度得点で性差、学年差が認められるかどうか、項目ごとにt検定を行った。その結果、すべての項目で有意差が示されなかった。今回の結果には回答者の性や学年からの影響が認められなかった。

最後に、項目間の関係を分析した。メディア作品の視聴経験と生死に対する態度を検討するため、項目1⑤と項目3との関連を分析した。項目1⑤で「とても弱い」と回答した者が特に少ないことからこのグループを分析から除き、それ以外の3群と項目1①で作品名を記述しなかった回答者群を加えた4グループ間で、生死の意識頻度の尺度得点を1要因分散分析した結果、主効果が有意になった ($f(139)=3.59, p<.05$)。Turkey法による多重比較で、「とても強い」グループと無回答および「やや強い」グループとの間で有意差が示された (5%水準)。影響をとても強く意識している回答者は生死を意識する頻度が高い結果となった。Fig. 6にグ

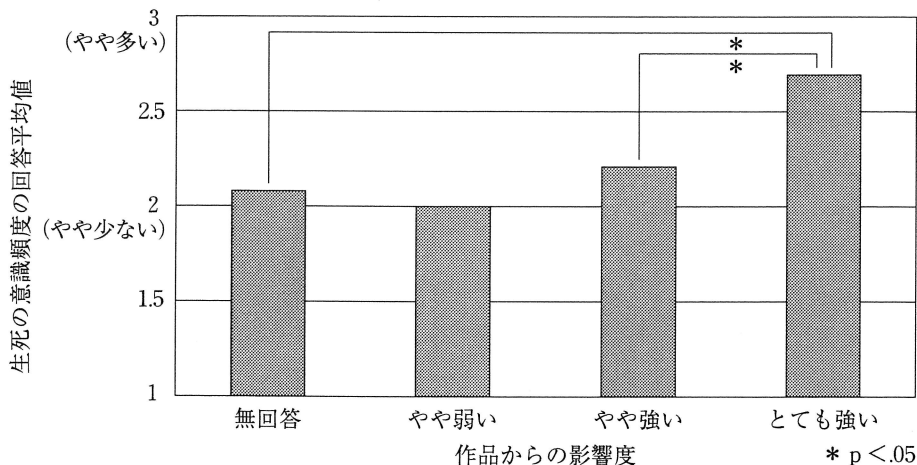


Fig. 6 影響度別の生死の意識頻度の強さ

ループごとの生死の意識頻度を示している。

4. 考 察

(1) メディア視聴の特徴

メディア視聴の影響は主に青年期中期以降であることが示された。Fig. 1の結果から、回答者は専門学校への入学前後に視聴した作品の影響を意識しやすいことが示された。最近視聴した作品はその経験や印象が想起されやすいため、この時期の回答が多かった可能性がある。一方、青年期中期以降ではメディアリテラシーが発達しているため、作品のもつメッセージから深く影響を受けやすいのかもしれない。

視聴のきっかけはテレビで偶然見た、コマーシャルで知ったという内容が多かった (Fig. 2)。流行している作品からの影響が大きいことがわかる。元々生死に関心があって関連する作品を視聴したのではなく、偶然視聴した作品から死を考察する機会が与えられたと考えられる。ただし、偶然視聴した作品すべてから同様に影響を受けるとは考えにくい。影響の程度は個々の作品がもっている特徴を反映すると考えられる。現在の青年が共感しやすい作品であることが必要であろう。したがって、死への態度形成に影響する作品群には共通性があると推測できる。視聴のきっかけには友人の役割も認められており、特定の作品からの影響が同世代間で広がっていることが示唆される。

(2) メディア視聴による影響

今回の結果から、青年期の死への態度形成に対してメディア作品視聴の影響が一般に認められることが示唆された。作品名を回答した割合が高く (項目1①)、作品からの影響は強いと自覚されている (Fig. 3)。項目2への回答割合があまり高いことから、項目1で示された特定の作品からの影響が強く意識されていると考えられる。項目1の作品からの強い影響を意識している回答者は全体の7割

になり、メディア作品からの影響が広範で強いことが認められた。一方、3割の回答者はそうした影響を意識していないが、そうした作品を見ていないだけなのか視聴しても影響を受けなかったのか検討の余地がある。

メディア視聴の影響内容 (Table. 1) は、第一に自分自身の生命や生き方に対する考え方を反省し、充実した生き方を志向することである。第二に、生死を考えるきっかけを作り出していることである。死を避けず、むしろ積極的に受容しようとする態度を形成していることが推察される。こうした影響は作品の視聴が死の準備教育の役割を果たしている可能性を示している。

デーケン⁹⁾は死への準備教育を概観して15の目標を示している (Table. 2)。本調査で得られたメディア作品からの影響内容と比較すると、その分類のうち「死についての深い理解(2)」や「時間の貴重さの発見(11)」に対応していると考えられる。死に関する病気、自殺、葬儀などの個別的な内容の理解を深めるよりも、生と死全体を再考する手がかりを学生に

Table. 2 死の準備教育の15の目標 (デーケン, 1986)

1	死へのプロセス, 死にゆく患者の理解促進
2	自身の死の準備, 死についてのより深い思索
3	悲嘆教育
4	死への過大な心理的負担を軽減すること
5	死に関するタブーを除くこと
6	自殺についての理解, 自殺予防
7	末期癌患者に対する告知についての認識
8	倫理的問題 (植物人間, 人工的延命, 安楽死)
9	医学, 法律に関する理解 (死の判定, 臓器移植)
10	葬儀についての理解
11	時間の貴重さの発見, 価値観の見直し
12	死の芸術の習得
13	個人的な死の哲学の探究
14	宗教での死の解釈を探る
15	死後の生の可能性を考察

与えていると考えられる。メディア視聴はロールプレイやエクササイズ経験と同様に死に関わる態度を顕在化する機能があると考えられる⁹⁾。

一方、テレビやゲームなどのメディアが青年期の死の概念形成に悪影響を与えているとの指摘がなされている¹⁾。今回の調査ではメディア視聴により死を非現実的に理解することや軽視することといった死の態度形成に逆行する影響内容は特に認められなかった。本調査では対象者が福祉を専門としているので死を真剣にとらえようとする傾向があるため、あるいは影響を受けた年代が青年中期以降でありメディアを批判的にとらえうる能力があったため、望ましくない影響を示さなかったと考えられる。

また、作品の視聴から死について不安や恐怖を感じたとの影響が回答されたことから、そうした感情への対処が必要になる場合も想定される。作品の視聴前後に死に関して他者と話し合うといった活動を通じて、個人内の不安感が強くなりすぎないようにすることが必要だと考えられる。

(3) 青年期の死に対する意識

Fig. 5の結果から、対象者の生死に対する意識頻度がやや多いことが示唆される。青年期に死を見つめようとする傾向のあることが示された³⁾。生死を意識しやすい年代であるため、関連するメディアからの影響を受けやすいと考えられる。なお、調査対象者が介護を専門としている学生であるため、授業や実習などでふだん死を意識する機会が多い可能性がある。

Fig. 6にある結果から、メディア視聴の影響を自覚する程度が特に高いグループは生死を日常意識しやすい傾向が認められた。この関係には2つの可能性があり、以前から生死を意識しやすい対象者はメディアからの影響をより受けやすかったことあるいはメディアからの影響をより強く受けたために生死を意識するようになったことがこの原因として推定される。この結果だけでは2つの因果関係が特定することは困難であるが、影響内容の記述 (Table. 1)

に死を考えるきっかけとなったという記述が相当数あったことから、後者のメディア作品の視聴が原因で生死の意識頻度に影響を与えた可能性が高いと考えられる。メディアからのとても強い影響を自覚した約3割の回答者 (項目1⑤) は生死の意識頻度が高く、死に対する態度形成にメディア視聴からの影響が顕著であるといえよう。

死に対する態度には個人差が大きいが (Fig. 5)、今回の視聴契機の結果にあるように、偶然に経験したことがその差をもたらしている可能性がある。死に対する態度は自発的に形成されるのであり、メディア視聴はその発達に部分的にせよ貢献していると考えられる。

(4) 今後の課題とまとめ

本研究で調査されたメディア作品は一般に公開されたものである。日本で視聴できる生死に関するビデオのリストも同様に一般の作品のみで構成されている¹⁰⁾。一方、アメリカではそうした目的を含む作品が充実しており、対象年代ごとの作品リストが作成されている¹¹⁾。日本では死への準備教育を目的とした視聴覚教材が十分に作成されていないと思われる。国内にこうしたメディア作品を導入することが重要であろう。

本研究では以下の点が今後の研究課題として残っていると考えられる。最初に、調査対象者を福祉系以外の学生に広げることである。高齢者の介護という死に関わる内容を学習している学生が回答者であったため、今回の調査結果が青年一般の傾向を反映しているかどうかをさらに検討する必要がある。次に、今回の調査で回答された作品内容をより吟味することが必要であろう。具体的な作品分析が求められよう。さらに、本調査では生死の意識頻度の点で死への態度を分析したが、死についての基準化された態度尺度を利用し、顕在的態度と同様に潜在的態度との関連を検討することが重要であろう¹²⁾。

本調査から、青年期の死に対する態度形成が近年のメディア作品を視聴した経験から影響を受けてい

ると考察される。こうしたメディア作品の視聴経験が死への態度形成を自律的に発達させる契機となっていると考えられる。死への準備教育の効果をさらに広めるために、作品視聴が個人的な体験にとどまるのではなく、他者と経験を共有するといった活動が重要であろう。

引用文献

- 1) Wass, H. Death in the Lives of Children and Adolescents. *H. Wass and R.A. Neimeyer (eds.) Dying: Facing the Facts*. Taylor & Francis, 1995, 269-301.
- 2) 丹下智香子「青年前期・中期における死に対する態度の変化」,『発達心理学研究』15, 2004, 65-76.
- 3) 稲村博「子どもにとって死の意識とは」稲村博・小川捷之(編)『シリーズ・現代の子どもを考える16 死の意識』共立出版, 1983, 1-52.
- 4) 澤井敦「死と死別の社会学—社会理論からの接近」, 青弓社, 2005.
- 5) アルフォンス・デーケン『生と死の教育』, 岩波書店, 2001.
- 6) Durlak, J.A. Changing Death Attitudes through Death Education. *R.A. Neimeyer (ed.) Death Anxiety Handbook: Research, Instrumentation, and Application*, Taylor & Francis, 1994, 243-260.
- 7) 総務省統計局「平成13年社会生活基本調査統計表」, 2002.
- 8) 藤腹明子「教材としての映画・テレビ—看護教育の体験をふまえて」, アルフォンス・デーケン(編著)『死への準備教育第1巻 死を教える』, メヂカルフレンド社, 1986, 270-283.
- 9) アルフォンス・デーケン「死への準備教育の意義—生涯教育として捉える」, アルフォンス・デーケン(編著)『死への準備教育第1巻 死を教える』, メヂカルフレンド社, 1986, 1-62.
- 10) 栗林玲子・森下育彦『「生」と「死」を考える映画・ビデオガイド』,『死生学がわかる』, 朝日新聞社, 2000, 148-152.
- 11) Wass, H., & Balk, D.E. Resources. *H. Wass & R.A. Neimeyer (Eds.) Dying: Facing the Facts*. Washington, DC: Taylor & Francis, 1995, 447-456.
- 12) 河村壮一郎「主観的確率による死の意識の測定」,『鳥取女子短期大学研究紀要』42, 2000, 17-24.